

2020年度学生アンケート報告

—2020年度1年生対象「コミュニティ人間科学部学生の地域体験と知識に関するアンケート」の分析結果—

西島 央*・大堀 研**・伊藤真木子***

1. 学生アンケート実施の経緯と目的及び学生アンケートの概要

コミュニティ人間科学部附置コミュニティ活動研究所では、学部所属学生のさまざまな活動体験や大学での学習・研究に対する意欲・関心のようすなどを把握して、授業の内容・方法の改善に資することを目的に、開所初年度より、学生アンケートを実施する教育研究プロジェクトに取り組んでいる。

本報告は、2020年度に在籍している1年生を対象に実施した学生アンケートの結果をまとめたものである。西島が数量データ部分の記述的整理を行い、大堀が自由記述部分より特徴的な記述を紹介して、伊藤がアンケート実施やエディティング作業の過程で気づいた点を、次年度以降のアンケートに向けての記録としてまとめる。

1.1 学生アンケートの目的と今年度の学生アンケート実施の実状

コミュニティ活動研究所の教育研究プロジェクトの一つとして、学生対象のアンケートを実施することになった経緯は、本所報創刊号の「2019年度学生アンケート報告」（西島・大堀・伊藤 2020）に詳しいので、ここでは省略する。

本プロジェクト立案時に設定した目的は、「中長期的には、どの学年に対しても入学時と3年時または4年時の都合2回の調査を行っていき、入学年度ごとの活動体験や『地域』に

対する関心や背景の違いや、在学期間中の学習・研究の積み重ねによる意欲・関心の推移の把握をして、授業の内容・方法の改善に資すること」である。

立案時の設定に基づき、今年度の学生アンケートは、昨年度に引き続き1年生のみを対象に実施する計画であった。当初は、「2019年度学生アンケート報告」をふまえて、アンケートの目的と項目を見直してから、今年度の学生アンケートに臨む予定であった。そのようにして、毎年少しずつ目的と項目に修正を加えながらアンケートを積み重ねていき、徐々にではあれ、意味のある学生アンケートを作り上げていきたいと考えていた。

しかしながら、2020年2月頃からの新型コロナウイルス感染症の流行により、2020年度の大学の授業は基本的にオンラインで行われることになって、我々教員も大学に出勤する機会が減ってしまった。そのため、第一に、昨年度のアンケートの見直しをする場を設けることができなかった。第二に、アンケートをオンラインによって実施せざるを得ないという調査方法上の制約が生じた。

そこで、本プロジェクトに携わる西島、大堀、伊藤の3人は、メール等で相談をして、第一に、アンケート項目の見直しはせずに、基本的に昨年度の項目をそのまま踏襲すること、第二に、アンケートをオンラインで実施できるように調整することとした。その結果、第一に、今年度の学生アンケートの項目は、学生の活動体験だけを扱うこととした。具体的には、①中学1年時と現在の居住地、②引っ越し経験、③小学校高学年から現在までのさまざまな活動体

*青山学院大学

**同上

***同上

験、④中学時の通学と週末の外出のようす、⑤国内外への旅行の経験、である。第二に、アンケートのオンラインでの実施は、本学のラーニング・マネージメント・システム（LMS）であるCourse Powerのレポート機能を用いて、一定期間内に、MS-Wordで作成したアンケートに回答を入力して、できる限りPDFにして提出させるという方法をとることとした。

1.2 学生アンケートの概要

アンケートは、以下の要領で実施した。なお、アンケート本体は、本稿末尾に掲載した。

i. アンケート題目：「コミュニティ人間科学部学生の地域体験と知識に関するアンケート」

ii. 対象者：コミュニティ人間科学部2020年度1年生全員

iii. 実施時期：2020年10月1日「地域社会調査法入門（基礎調査）」の授業終了10分前から授業終了後1時間10分後まで ただし、Course Powerのレポート機能を用いた提出期間は10月6日13時まで

iv. 実施方法：ラーニング・マネージメント・システム（LMS）であるCourse Powerのレポート機能を用いたオンライン調査

v. 回収数と回収率：229票、95.4%

2. 数量データ部分の記述的整理

本章では、数量データ部分の回答を記述的に整理していく。毎年度のアンケート結果を積み重ねていき、入学年度ごとの活動体験や「地域」に対する関心や背景の違いを把握して、授業の内容・方法の改善に資することが目的なので、昨年度のアンケート結果との比較を意識して、同じ項目を取り上げることとする。基本的には、単純集計結果を提示するが、いくつかの項目については、クロス分析結果も紹介することとする。

2.1 中学1年時の居住地

どのような「地域」でどのような人々に囲まれて幼少期から思春期を過ごしたかは、「地域」に対する関心のもち方に影響していると考えられる。そこで、学生の出身地の地域特性を把握するために、中学1年時の居住地を、都道府県・区市町村レベルで尋ねた。

中学1年時の居住地を尋ねることにした理由については、「2019年度学生アンケート報告」に詳しいが、住所をある程度正確に覚えている年齢で、多くの場合に、保護者と同居していて、そこからそれほど遠くない学校に通っていて、生活圏がある程度の範囲に収まっている時期として、限定的に設定している。

まず、図表1と図表2から、居住地の都道府県別の分布をみてみよう。神奈川県が104人で、全体の半数弱を占めている。神奈川県に東京都と千葉県と埼玉県を合わせた南関東4都県では165人で、全体の7割に上る。さらに北関東の3県も合わせると8割弱となり、中学1年時の居住地でみれば、関東地方出身の学生が大半を占めている。中学1年時に南関東4都県ないし関東地方に住んでいた学生の割合は、昨年度とほぼ変わりが無いのだが、最も大きな違いとして、神奈川県に住んでいた学生が15人多かった半面、東京都に住んでいた学生が19人少なくなったことを指摘しておきたい。

関東地方以外の道府県については、秋田県をはじめ18県には中学1年時に住んでいた学生がいない。また、中学1年時に近畿地方に住んでいた学生は、昨年度の3人から6人が増えているものの、近畿地方以西では、昨年度の19人に対して20人とほぼ変わりが無い。

なお、今年度は、中学1年時に外国に住んでいた学生はいない。

続いて、図表3から、居住地の区市町村別の分布をみてみよう。東京23区が18人、道府県庁所在地が78人、その他の市部が120人、郡部は13人である。昨年度と比べると、東京都に住んでいた学生が大幅に少なくなった分、東京23区に

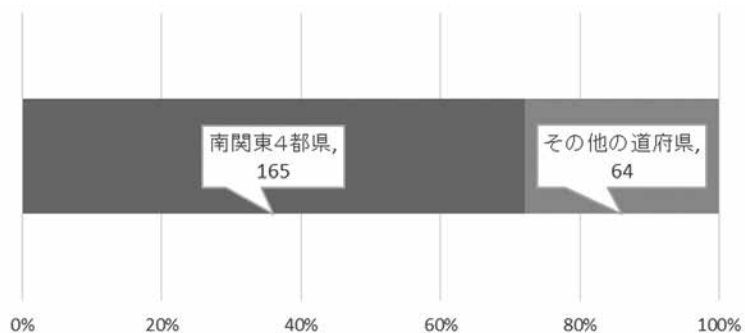
図表1 都道府県別にみた中学1年時の居住地 (人)

都道府県名	人数	都道府県名	人数	都道府県名	人数
北海道	1 (1)	石川	0 (0)	岡山	2 (1)
青森	1 (1)	福井	0 (0)	広島	3 (3)
岩手	2 (1)	山梨	2 (1)	山口	0 (0)
宮城	2 (3)	長野	1 (4)	徳島	0 (1)
秋田	0 (1)	岐阜	3 (0)	香川	0 (1)
山形	1 (1)	静岡	6 (6)	愛媛	1 (0)
福島	3 (5)	愛知	7 (3)	高知	0 (0)
茨城	4 (9)	三重	1 (0)	福岡	6 (5)
栃木	5 (5)	滋賀	0 (0)	佐賀	0 (1)
群馬	2 (3)	京都	1 (1)	長崎	0 (0)
埼玉	17 (21)	大阪	2 (1)	熊本	0 (2)
千葉	12 (11)	兵庫	2 (1)	大分	2 (0)
東京	32 (51)	奈良	0 (0)	宮崎	0 (1)
神奈川	104 (89)	和歌山	0 (0)	鹿児島	0 (0)
新潟	3 (1)	鳥取	0 (0)	沖縄	0 (0)
富山	1 (1)	島根	0 (1)	海外	0 (2)

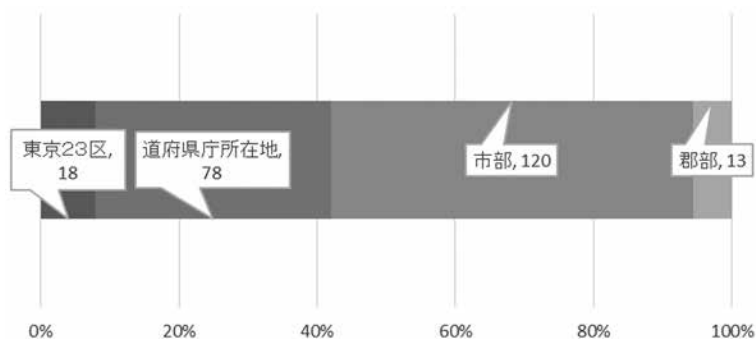
注1 無回答=0 (1)

注2 括弧内は2019年度調査結果

図表2 中学1年時の居住地南関東4都県とそれ以外に分類 (人)



図表3 中学1年時の居住地区市町村別に分類 (人)



住んでいた学生も26人からめだって減っているが、それ以外はほとんど変わらない。それゆえ、昨年度と同様に、東京23区と都道府県庁所在地とその他の市部に住んでいた学生で9割以上を占めており、郡部に住んでいた学生が非常に少ないという傾向もまた変わっていない。

なお、中学1年時に横浜市に住んでいた学生は48人（昨年度は42人）と全体の2割を占め、キャンパスのある相模原市に住んでいた学生は9人（昨年度は3人）だった。

2.2 現在（大学1年時）の居住地

南関東4都県周辺以外の地域の出身者の多くは、大学に通うために、大学周辺の寮や下宿などに引っ越してきて住んでいると思われる。また、高校まで東京都や神奈川県に住んでいた場合でも、通学時間を考慮して大学周辺の寮や下宿などに住むようになった学生もいると予想される。反対に、東京都や神奈川県以外でも、実家から通っている学生もいるかもしれない。一人暮らしや寮生活の経験も、長距離通学の経験も、「地域」に対する関心のもち方に影響していると考えられる。そこで、学生の現在の居住地の地域特性や通学状況を把握するために、現在、つまり大学1年時の居住地を、都道府県・区市町村レベルで尋ねた。

図表4から、大学1年時の居住地をみてみよう。キャンパスのある相模原市に住んでいる学生が53人で2割強を占める。この人数は昨年

度とほとんど変わらない。中学2年生以降に家族で相模原市に移住してきた学生もいるだろうが、それを考慮しても、40人程度が大学に通うために相模原市に引っ越してきたのではないかと考えられる。次に多いのが横浜市の50人だが、中学1年時に横浜市に住んでいた学生が48人いることを考慮すると、大学に通うために横浜市に引っ越してきた学生はほとんどいないのではないだろうか。

一方で、東京都と神奈川県以外の県＝その他の県に住んでいる学生は、昨年度より11人多くなって34人いる。その学生のなかには、千葉県、埼玉県、山梨県、静岡県といった近県以外に、栃木県、茨城県、新潟県、富山県、愛知県、大阪府、福岡県に住んでいる者もいた。このことは、新型コロナウイルス感染症の感染予防のために、大学がオンラインで授業をするようになったことを受けて、実家に帰っている、または入学当初から大学近辺に住まなかった学生が一定数いることを示しているといえよう。

来年度以降は、いわゆる対面の授業とオンラインの授業の併用が予想されるが、その状況で、学生たちはどこでどのような居住形態で生活し、どのような学生生活を送っていくことになるのか、そのことが、学生時代の人間形成や社会関係資本の蓄積や本学部での学びにどう影響することになるのか、ていねいに検証していく必要があるだろう。

図表4 大学1年時の居住地

地域	人数	(%)
東京23区	21(30)	9.2
東京都市郡部	26(41)	11.4
神奈川県横浜市	50(47)	21.8
神奈川県川崎市	12(13)	5.2
神奈川県相模原市	53(54)	23.1
神奈川県その他の市郡部	33(29)	14.4
その他の県	34(23)	14.8

注1 括弧内は2019年度調査結果

2.3 引っ越し経験の有無

引っ越しをして、それまで住んでいた「地域」とは違う「地域」に住むようになると、それぞれの「地域」の良いところや悪いところが気になったり、共通点や相違点に気づいたりすることもあるだろう。それに対して、生まれてから一度も引っ越しをしたことがないと、自分が住んでいる「地域」の特性を相対化して捉える機会はあまりないかもしれない。そう考えると、引っ越し経験の有無は、「地域」に対する関心のもち方に影響している可能性がある。そこで、これまでの引っ越し経験の有無を、その回数で尋ねた。

図表5から、引っ越し回数をみてみよう。引っ越しをしたことがない（「0回」）学生が53人で2割強いる。このうち42人は中学1年時に南関東4都県に住んでいた。また、前項でみた東京都と神奈川県以外の近県以外に現在住んでいる学生たちが5人いた。「1回」引っ越しした経験がある学生が90人で約4割、「2回」引っ越しした経験がある学生が52人で2割強と、1～2回の引っ越し経験のある学生が6割ほどに上った。一方で、「5～7回」と何度も引っ越しを経験した学生も6人いた。

図表5 引っ越し回数

回数	人数	(%)
0回	53	23.2
1回	90	39.5
2回	52	22.8
3回	18	7.9
4回	9	4.0
5～7回	6	2.6

注 無回答＝1

2.4 小学校高学年から現在までのさまざまな活動体験のようす

これまで住んでいた居住地で、どのような人々と関わってきたか、どのような場所で遊んできたか、どのような施設を利用してきたかな

どといった活動体験の蓄積は、「地域」に対する関心のもち方に影響していると考えられる。そこで、これまでの活動体験として、図表6にある12項目を挙げて、それぞれの活動体験について、「小学校高学年」「中学生」「高校生」「現在」の4つの時期ごとにどのくらいしていたかを4点尺度で尋ねた。12項目の活動体験は、昨年度と同じもので、①A～Cが家庭や地域での生活に関わる活動体験、②D～Fが家族や友達との余暇に関わる活動体験、③G～Jが社会教育施設使用に関わる活動体験、④K～Lがいわゆるエンターテインメントに関わる活動体験である。

まず、図表6から、12項目の4つの時期ごとの活動体験の実施状況を概観してみよう。なお、ここには「よくした」と回答した割合を体験率として示してある。

主だった特徴を大きく4点ほど挙げてみよう。

第一に、昨年度と同様に、多くの項目で、学校段階が上がるにつれて「よくした」割合＝体験率が少なくなっていく。なかでも、「A. 地域のお祭りや行事に参加すること」、「B. 地域の子ども会活動に参加すること」、「E. 公園で遊ぶこと」の3項目は、「小学校高学年」から「中学生」に上がった段階での減少率が20～50ポイントと顕著である。

第二に、一方で、「F. 映画館に映画を見に行くこと」、「L. コンサートや音楽フェスに行くこと」の2項目は、「小学校高学年」から「高校生」にかけて、学校段階が上がるにつれて体験率が10～30ポイントほど多くなっている。

第三に、「小学校高学年」に注目してみると、「A. 地域のお祭りや行事に参加すること」、「B. 地域の子ども会活動に参加すること」、「E. 公園で遊ぶこと」、「J. 体育館や運動場に行くこと」の4項目の体験率は、4割台から6割台とかなり高い。一方で、「C. 教会やお寺等の宗教施設にお参りすること」、「I. 博物館や美術館に行くこと」、「K. スポーツ観戦に行くこと」、「L. コンサートや音楽フェスに

図表6 各時期の活動体験を「よくした」割合＝体験率

(%)

時期	A.地域のお祭や行事に参加すること	B.地域の子ども会活動に参加すること	C.教会やお寺等の宗教施設にお参りすること	D.山や海や川で遊ぶこと	E.公園で遊ぶこと	F.映画館に映画を見に行くこと
①小学校 高学年	61.0	43.0	11.0	28.9	65.8	18.4
②中学生	28.5	5.3	8.3	12.3	14.5	38.2
③高校生	12.3	2.6	7.9	5.7	2.2	45.6
④現在	3.9	0.9	5.7	3.9	3.5	30.3

時期	G.公民館に行くこと	H.図書館に行くこと	I.博物館や美術館に行くこと	J.体育館や運動場に行くこと	K.スポーツ観戦に行くこと	L.コンサートや音楽フェスに行くこと
①小学校 高学年	22.0	25.6	10.6	46.7	14.1	6.2
②中学生	7.9	15.5	4.4	35.7	13.2	12.8
③高校生	4.8	23.9	3.1	25.6	10.1	20.4
④現在	1.8	5.3	4.4	11.5	7.0	10.1

注 無回答を除いた有効回答を100%とした

行くこと」の4項目の体験率は、10%内外とかなり少ない。なお、ほとんどの項目で「よくした」割合＝体験率が昨年度より5ポイント程度低くなっていた。なかでも「D. 山や海や川で遊ぶこと」は昨年度の40.4%から10ポイント以上低くなった。

第四に、「高校生」に注目してみると、多くの項目で10%内外にとどまっていた、さまざまな活動の体験率が非常に少ない。そのなかであって、「F. 映画館に映画を見に行くこと」は45.6%と、昨年度と同様に4つの学校段階の中で体験率が最も高くなっている。

以上をまとめるならば、2020年度の1年生の活動体験の特徴として、①学校段階を上がるにつれて、さまざまな活動体験の体験率は少なくなっていく傾向にあること、②活動の種類によって体験率には大きな違いがみられること、

③2019年度の1年生と比べてさまざまな活動体験の体験率が少し低いことの3点に集約できそうである。

ただし、前回アンケートから引き続き用意した活動体験に偏りがあったのかもしれないので、今後は、中学生以降で体験率が上がるような活動があるのかどうかなどを検討していくとともに、なぜ学校段階が上がるにつれて体験率が少なくなる傾向にあるのか、日常生活のあり方、学校生活のあり方、そして地域の特性などに関連づけて、学生の活動体験のようすを把握していく必要がある。

続いて、図表7から、体験率の高い「小学校高学年」に限定して、居住地別に「よくした」割合＝体験率がどのように違うかをみてみよう。ただし、居住地として用いるのは中学1

年時の情報なので、住んでいた時期と活動体験の時期にズレがあることに留意する必要がある。なお、ここで用いる居住地別の指標は「区市町村別」である。中学1年時に東京23区に住んでいた学生は18人、郡部に住んでいた学生は13人しかいないので、クロス分析の結果の読み取りにあたって留意する必要がある。

主だった特徴を挙げてみよう。

第一に、体験率は、多くの項目で、東京23区、道府県庁所在地、市部に住んでいた学生より、郡部に住んでいた学生のほうが高い傾向が

みられた。その傾向がはっきりみられた項目は、「A. 地域のお祭りや行事に参加すること」、「D. 山や海や川で遊ぶこと」、「G. 公民館に行くこと」、「H. 図書館に行くこと」、「J. 体育館や運動場に行くこと」である。

第二に、居住地別の体験率の他のパターンとしては、「B. 地域の子ども会活動に参加すること」が「東京23区<道府県庁所在地≒市部≒郡部」と、東京23区だけ低い傾向がみられた。

第三に、それ以外の項目では、居住地別の体験率の違いは小さい。これは昨年度の調査では

図表7 中学1年時の居住地区市町村別にみた小学校高学年の活動体験「よくした」の割合（％）

活動体験	東京23区 (18人)	道府県庁所在地 (78人)	市部 (120人)	郡部 (13人)
A. 地域のお祭りや行事に参加すること	61.1	58.4	60.0	84.6
B. 地域の子ども会活動に参加すること	33.3	46.8	41.7	46.2
C. 教会やお寺等の宗教施設にお参りすること	16.7	9.1	10.0	23.1
D. 山や海や川で遊ぶこと	16.7	22.1	32.5	53.8
E. 公園で遊ぶこと	55.6	61.0	70.8	61.5
F. 映画館に映画を見に行くこと	22.2	20.8	15.8	23.1
G. 公民館に行くこと	16.7	16.9	25.2	30.8
H. 図書館に行くこと	33.3	19.5	26.1	46.2
I. 博物館や美術館に行くこと	5.6	7.8	13.4	7.7
J. 体育館や運動場に行くこと	38.9	45.5	45.4	76.9
K. スポーツ観戦に行くこと	16.7	15.6	12.6	15.4
L. コンサートや音楽フェスに行くこと	5.6	6.5	6.8	0.0

注 無回答を除いた有効回答を100%とした

みられなかった傾向である。なかには10ポイント前後の差がみられる項目もあるが、それが居住地の特徴を表したもののなのか、東京23区と郡部の居住者の少なさによるもののなのか、2019年度に比べて体験率が全般にやや低いことの影響か、またはその他の要因なのかが判然としない。

今回の調査では、居住地別の体験率の違いの小さい項目が多かった背景を検証することは難しいが、調査の回数を重ねながら、要因を探るとともに、「地域」別の体験活動状況を捉える適切な指標を見つけて、調査の改善を図ってきたい。

以上のような、これまでの多様な活動体験とその背景の違いをどのように共有し、「地域」に対する具体的な関心につないでいくか、「お国自慢」に関する自由記述の分析なども含めて、検討していくことが望まれる。

2.5 中学時の通学のように

中学校への通学は、公立学校であっても小学校より学区が広くなることや、社会科や理科等の学習の積み重ねから、日々の生活のなかで、自分の住んでいる「地域」を相対化して捉える機会となり得るだろう。その意味で、中学校への通学は、「地域」に対する関心のもち方に影響していると考えられる。そこで、中学校への通学のように、手段と時間の2つを尋ねた。

図表8から、通学手段の分布をみてみよう。公立学校が想定している一般的な通学手段である徒歩と自転車については、徒歩による通学が129人で自転車による通学が24人と、両方の手段を合わせて3分の2を占めている。一方で、バスや鉄道といった公共交通機関による通学が70人で約30%いた。昨年度と比べると公共交通機関による通学が10ポイントほど多かった。図表には示していないが、これを区市町村で分類した居住地別にみてみたところ、鉄道（「バスと鉄道」を含む）による通学が東京23区では18人中10人（55.6%）に上ったほか、道府県庁所在

地でも77人中22人（28.6%）いた。今後は、その背景として、国立や私立の中学校に通っているのか、道府県庁所在地については市町村合併の影響なのかなどを見定めていく必要がある。

続いて、図表9から、平均通学時間を区市町村で分類した居住地別にみてみよう。まず、片道の平均通学時間は、全体では昨年度より約4分長い29.0分である。区市町村別にみると、東京23区は33.0分で、昨年度とほとんど変わらない。道府県庁所在地は31.9分で、昨年度より約8分長い。これは、公共交通機関を使った通学者が多くなったことと関連しているだろう。市部は27.1分で、昨年度より3分ほど長い。郡部は24.1分で、昨年度より約9分短くなっている。居住地別にみた平均通学時間の傾向は昨年度と大きく変わっていることから、通学手段と通学時間の背景を探るには、地域特性の他に通学している中学校の設置者にも目を向ける必要がある。

図表8 中学校への通学手段

通学手段	人数	(%)
徒歩	129	56.5
自転車	24	10.5
バス	12	5.3
鉄道	56	24.6
バスと鉄道	2	0.9
乗用車	5	2.2

注 無回答＝1

図表9 区市町村別中学校への平均通学時間(分)

東京23区 (18人)	33.0 (33.1)
道府県庁所在地 (78人)	31.9 (23.3)
市部 (120人)	27.1 (24.3)
郡部 (13人)	24.1 (33.3)
全体 (229人)	29.0 (25.4)

注1 無回答を除く

注2 括弧内は2019年度調査結果

2.6 国内外への旅行の経験

中学校への通学が日常のなかで自分の住んでいる「地域」を相対化する機会となり得るとしたら、旅行は、非日常として自分の住んでいる「地域」を相対化する機会となり得るだろう。その一方で、多少、手段や時間が違ったとしても、全員に経験がある通学と違って、旅行の経験は、経験の有無や頻度、行き先などで、人によって相当大きく異なっていると予想される。それだけに、旅行の経験の有無とその多様な状況は、「地域」に対する関心のもち方に影響していると考えられる。そこで、昨年度に引き続き、家族での帰省や学校の修学旅行等を除いて、国内旅行と海外旅行のそれぞれについて、経験があるかどうか、経験がある場合は、最も印象に残っている旅行の詳細を尋ねた。

図表には示していないが、国内旅行の経験がある学生は95.2%で、海外旅行の経験がある学生は53.9%で、昨年度とほぼ同じだった。半数の学生に海外旅行経験がある一方で、国内旅行の経験のない学生も数人いることに留意する必要がある。

旅行の経験を全部聞くのは難しいので、最も印象に残っている旅行について、具体的に、時期、同行者、行き先、主な移動手段といった詳細を尋ねた。

図表10と図表11から、時期と行き先をみてみよう。最も印象に残っている旅行に行った時期は、「小学校高学年」までが4割弱、「高校生」が4割で、残りが「中学生」の時と「大学生」になってからである。「大学生」になってからの旅行を挙げた者は、昨年度は18.4%いたが、今年は新型コロナウイルス感染対策で旅行に出かけにくくなっていたこともあって、旅行そのものに行っていないと思われ、わずかに4.2%にとどまっている。

旅行先は、国内では、近畿に40人（17.8%）と集中した昨年度と異なり、今年度は、関東の26人（12.2%）、中部と沖縄の24人（11.3%）、近畿の21人（9.9%）などと大きくばらけた。中国、

図表10 最も印象に残っている旅行に行った時期

時期	人数	(%)
小学校入学前	9	4.2
小学校低学年	29	13.4
小学校高学年	45	20.8
中学生	35	16.2
高校生	89	41.2
大学生	9	4.2

注 非該当＝10、無回答＝3

四国が5人未満なのは昨年度と同様だ。海外では、昨年度は、「ハワイ・グアム・サイパン」を米国という括りに含んでいたの、米国の43人（19.1%）が一番多かったが、今年度は「ハワイ・グアム・サイパン」の28人（13.1%）が最も多い。それ以外では、アジアが全体では13人（6.1%）で、米国の11人（5.2%）、ヨーロッパの10人（4.7%）とほぼ同じで、海外の旅行先もばらけている。

最後に、最も印象に残っている旅行の同行者について、図表12から旅行に行った時期別にみてみよう。「小学校高学年以下」つまり小学生の時にいった旅行の95.2%、中学生の時にいった旅行の91.4%が家族との旅行である。それが、高校生になると43.8%が友だちとの旅行と、学校段階が上がるにつれて、同行者が家族から友だちへと変わってきている。ただし、昨年度と比べると、中学生と高校生のときに家族と行った旅行を挙げる者が増えている。

国内外への旅行による多様な経験をどのように共有し、「地域」に対する具体的な関心につないでいくか、自由記述の分析なども含めて、検討していくことが望まれる。

（西島 央）

3. 自由回答記述欄にみる特徴的記述

3.1 オンライン化による記述量の変化

今年度は、まず自由回答の記述量に注目した。2回目の実施となるため、昨年度との比

図表11 最も印象に残っている旅行の旅行先

旅行先（国内）	人数	(%)	旅行先（外国）	人数	(%)
北海道	15	7.0	中国	1	0.5
東北	14	6.6	韓国	3	1.4
関東	26	12.2	タイ	1	0.5
中部	24	11.3	台湾	5	2.3
近畿	21	9.9	シンガポール	3	1.4
中国	3	1.4	米国	11	5.2
四国	1	0.5	ハワイ・グアム・サイパン	28	13.1
九州	5	2.3	ヨーロッパ	10	4.7
沖縄	24	11.3	オセアニア	5	2.3

注 非該当=10, 無回答=6

図表12 旅行に行った時期別にみた同行者 (%)

	小学校高学年 以下（83人）	中学生（35人）	高校生（89人）	大学生（9人）
家族	95.2	91.4	43.8	11.1
友だち	1.2	2.9	43.8	66.7
その他	3.6	5.7	12.4	22.2

較にしかならないものの、今年度は記述量が増えている。たとえば、問2のC「あなたが中学1年生の時に住んでいたところのお国自慢を自由に書いてください」に対する回答をみると、昨年度は有効回答1件につき46.2字（小数点第2位を繰り上げ、以下同様）であったのに対し、今年度は90.0字となっている。また問5のBのe、（国内、海外どちらでも）旅行経験のなかで最も印象に残っていることへの回答は、昨年度が52.3字、今年度は66.2字である¹。

要因としては、既述の通り今年度はオンライン調査となったことがあげられよう。昨年度は授業時間の一部を回答時間としたのに対し、今年度は日数に余裕があったことが影響していると考えられる。また今年度は、学生は記入用のワードファイルにコンピュータで回答を入力した。筆記具を用いての手書きよりも入力、書き直しなどが容易であることが影響した可能性もあるだろう。

3.2 中学1年時の居住地域についての「お国自慢」

内容面にもふれておこう。問2のC（中一時居住地のお国自慢）に対する回答としては、昨年度同様、地域に存在する自然、食べ物、お祭り、施設（たとえば著名な公園や商業施設）、出身人物など、〈あるもの〉についての既述が圧倒的に多い。その中には、治安の良さや、交通の便の良さに関する既述も含まれる。単一の要素のみ記述しているものもあるが、多くは複数の要素を組み合わせで回答している。

それらに比べると少ないが、地域内の人間関係について記述していたものもあった。224の有効回答のうち、27件を該当するものと判断した。具体的例としては以下がある。

- マンションに住んでいたのですが、マンションの住人の関係は良好で、家族ぐるみでの付き合いもありました。良好な関係性は、自慢できるかなと思います。また、

スーパーが家の周りにたくさんあったので、便利でした。

人間関係への言及と判断した基準として、学校や学年を超えた住民間の関係に言及しているかどうかという点をおいた。したがって「友だちと遊びやすかった」やそれに類する回答は含めていない。また「町内会の行事が多い」というような回答も、微妙ではあったが、人間関係に言及したのではないものとみなした。「ファミリー層が多い」などの記述や、一方で、簡潔な記述であっても該当とみなしたものもある。たとえば「地域の人が交流するための機会が多い」や「住んでいる人が優しくかった」という記述で該当に含めた場合もある。以下のような回答も該当とみなした。

- （2020）私の住んでいた地域は、児童数の多い地域であった。運動会は、他のどの地域よりも人数が多く、大人数ならではの種目や企画、そして、地域との交流イベントがあり、そういった経験により、他者との協調性が身につけることが出来たのではないと思う。また、そのころから、地元の駅の周辺が発達しはじめ、区役所などの施設が新しくなるなど、地域としてはうれしいことがあった年でもあった。

このように、判断基準は絶対的なものとは言えない。すなわち27件という数字は、判定者によって変動する可能性が十二分にある。とはいえ、地域内の人間関係に言及した回答が少数であるということは、大方の一致をみると考えられよう。「コミュニティ」の語を関する学部において、4年間の学修を通じて変化がみられるか否か、注目したい。

なお、図書館に言及したものが4件、博物館に言及したものが2件あった。一方、公園に言及しているものは34件あった²。どれもコミュニティの拠点となりうる施設として重要で

あるものの、本学部は図書館・博物館については一定の教育プログラムを整備し教員も配置されているのに対して、公園については十分な教育・研究体制が構築されているとは言い難い。本問の件数の多寡のみで学生の興味関心の強さを判断すべきではないとしても、その手がかりとして注目し、学部の体制改善の一助としていくことが必要であろう。

3.3 最も印象に残っている旅行について

問5のBのe（国内、海外ともに印象的な旅行経験）については、やはり昨年度と同様、食事やショッピング、景色、家族や友人との活動など、（トラブルや失敗を含めて）楽しんだことを回答しているものが多い。ただ楽しんでいるばかりでなく、以下の回答にみられるように、旅行経験が地域社会について考えを巡らす契機となっている場合もある。

- 福島の人たちの暖かさ。地図上には存在すると記載されていたラーメン屋さんがなくなっていたり、若者が全くいないため驚いた。しかしお年寄りがバリバリ元気に働いている姿が本当に印象的でした。
- 北海道はとにかく広く、次の目的地までの移動時間がとても長いということ。鉄道はほとんどなく、車で移動しないと不便であるということ。
- 沖縄が経験した戦争とその後の日本への帰属への道のりについて学んだ。また現在の沖縄が抱える基地問題について、その場に行って座り込みをしている人に話を聞いた。その後、基地がなくなった場所がどのような変貌を遂げるのかについても見学に行った。図書館での写真資料の閲覧、それぞれがどのような考えを持っているのかを考えさせられた。

また海外旅行や留学の経験は、自身が生きる社会・文化を相対化する良い契機となっている

ことが窺える。この点も昨年度と同様である。

- モルジブ諸島に入国する際に自然を重視している国であったため、環境保護税の様なものを高く払わされたことを鮮明に覚えている。その他にも素晴らしい手付かずの自然や夜空の空の透明度などにも同様に驚き、印象に残っている。
- 私は、世界一幸福な国とうたわれているブータンに交換留学をしたことがあるのですが、その時に現地の人が道路にいる蛙一匹を助けるために、一度車から降りて助けあげていた姿が忘れられません。

筆者の個人的な感触としては、本学部教育・研究について国内のコミュニティを主な対象としているとの印象を持たれる場合が多いように思う。だが、国内のコミュニティについて考えるのであっても、海外事例との比較が有効な場合もあり、教育・研究の対象を国内中心に狭める必然性はない。本学に限らず、「地域」「コミュニティ」を冠する学部における、学生の留学を含めた海外に関連する教育・研究の現状、進め方等は、今後の検討事項の一つと思量する。

(大堀 研)

4. アンケート実施過程における議論

昨年度初めて実施したこのアンケートは、紙の調査票を、1年生対象必修授業の時間内に配布・回収するという方法で行った。しかし、オンライン授業が続くなかで、今年度はそもそも実施できるのかどうか、どう実施するのか、というところからの判断が必要となった。西島・大堀・伊藤が集まって検討する時間をもつことができたのは8月中の一度だけで、その後も研究所員が集まって検討することはままならず、十分な準備が出来ないままに実施に至ったが、ここでは、実施してあらためて確認された課題などを、記録しておく。

4.1 実施目的の確認

このアンケートを実施する目的は、昨年度からいくつかの次元で考えられてきた。

まず一つ、直接的な目的としては、新入生の地域に関する意識や経験等の実態を把握し、各授業の改善等に資するデータを得るということ。二つめに、中長期的な目的としては、今後の各学生の意識や行動の広がりや深まりを追跡的に調査して把握し、学部のカリキュラム全体の改善に資するデータを得るということ。そして三つめに、より長期的な目的として、地域貢献を掲げる学部に入学するような学生の特性について定点的に調査して把握し、対外的にも活用されうるデータを収集蓄積していくということである。

とりわけ今年度は一つめの点を重視し、実施する判断をしたといえるだろう。オンライン授業が続く、学生と対面することなく、教員間での日常的な情報交換もないまま過ごすなかでは、新入生全体の様子が分からず、分からないなかで授業をしていることへの不安は非常に大きくあった。このアンケートが、新入生の様子を全体としてとらえることに少しでも役立てば、との思いがあった。

4.2 実施方法の選択

昨年度同様に、1年生全員が同一時間帯に受講する必修授業のなかの一日(西島担当、「リアルタイム型」での実施日)を使って、実施することとした。具体的には、本学のラーニング・マネージメント・システム(LMS)であるコースパワー上で、アンケート調査票(ワードファイル)を配布・回収した。授業時間内に、西島から口頭で、記入に当たっての注意事項を伝えた後、質疑応答を行い、授業終了後の回収をしたものである。

本所報で西島らが「IT環境に関するアンケート調査」について別途報告しているように、学部として、5月には、新入生を対象としてgoogleフォームでの調査を実施した経験が

あった。そのため、webフォームによる実施も検討したのだが、結局このような実施方法を選択したのは、下記の理由による。

①技術的な問題

まず、実施する側の技術的な問題として、実際に紙の調査票で尋ねた項目内容を、webフォームに落とし込んでいく作業は容易ではなかった。もう少し具体的にいえば、紙の調査票とwebフォームとで生じる項目レイアウトの違いや回答の仕方の違いが、回答の内容そのものにどう作用してくるのか仮説も無く作業することが、容易ではなかった。過去に紙の調査票で実施してきたものを途中からwebフォームでの調査に切り替えて実施している、という調査事例は多くあるが、その過渡期に注意すべき事柄や生じる問題などを整理して検討してみることが、出来なかったためである。

他方で、回答する側の技術的な問題として、webフォームによる回答が困難な学生がいるかもしれないということは、否定できなかった。(5月に実施したgoogleフォームによる調査での1年生の回答の回収率は93.8%であった。)そのため、オンライン授業でずっと行ってきたやり方—コースパワーを介しての資料配布やレポート提出—での回答を求める方が適切であろうとの判断があった。提出状況の把握も容易であり、学生への個別対応や、後々までのデータ保存等も考えやすいということもあった。

いずれにしても、今年度限りの応急的な対処として考えていたため、その限りでの最も簡易な方法を選択した、といえる。

②実施する目的と意義

次に、調査する側として、一人の回答内容の一覧性を重視した、ということがある。調査票は、昨年度から、プリントアウトしたときにA3判1枚で1名分となるように作成していた。一覧すると、回答した一人の学生のアンケートへの向き合い方や、思考のプロセスが見えてく

ることがある。その意義を重視したということである。

昨年度のエディティング作業では、回答票を丸ごと西島・大堀・伊藤の3人で眺めてみることで、無回答や無効回答を多く含む回答票については、その文脈や要因や含意といったものを検討することが出来た。効率的ではないのかもしれないが、エディティング作業を複数名で行うことは、「その他」といった回答が示す新たな視点や考え方を認識し共有するチャンスでもある。あえて「余白」部分に書かれたことに、気づかされることもあるだろう。こと今年度はオンライン授業が続く中で、新入生の様子が見え難いことから、一人一人の回答内容を、単に数値として処理するだけでなく、文脈として読み取ろうとすることの意義は大きいと考えられた。

他方で、回答する側の、回答のプロセスを考えても、回答票の一覧性は重要だと思われた。このアンケートでは、記憶を辿りつつ書いてもらうような設問が多く、後ろの設問に回答しながら、前の設問を書き直すというプロセスが生じることは大いにありうると考えている。○や×での回答を求めているところでわざわざ△と回答するとか、設問からは外れたメッセージを敢えて書き込むといった、設問に合致しない回答する側の感覚を表明する余地があっても良いと考えている。そのため、webフォームの誘導と規格に従って画面をスクロールしつつ一問一答の一方向で回答するというプロセスよりも、記入しつつ記入し直し、加除修正しつつ回答するというプロセスが無理なく生じることを、期待したものである。(ただ、こうした発想が、デジタルネイティブなどと称される世代に対して妥当なものなのかどうか、この点でも十分な議論は出来ていない。)

4.3 調査内容の選択

昨年度からの課題として、調査内容の精選の必要があったが、十分な検討は出来なかった。

昨年度と今年度の回答を比較検討するために、昨年度との違いは実施方法の違いだけに留めた方が良く、との判断もあった。結果として、具体的には、昨年度の項目から性別と知識問題を除いたものを今年度の調査内容とした。知識問題を除いたのは、実施方法上の制約が大きいと考えられたためである。技術的に不可能ではないと知りつつも、準備を整える余裕が無かった。

なお、正確に言えば、昨年度の調査票をそのまま配布したのではない。紙に直接書き込むのとは違い、ワードファイルにコンピュータで回答を入力することを考慮し、設問の指示文を適宜修正したほか、入力した時に生じるフォーマットのズレを無くすための工夫など、細かな修正を施した。(それでも、返ってきた回答票にはズレが生じているものなどあり、エディティング作業を増やすことにはなった。)

また実施当日には、「コロナ禍にあって今は行っていないが、通常であれば行っているはずのことを書いても良いか?」との質問を受けた。今回の調査では、新型コロナウイルス感染症への対応が求められた中での行動実態を直接測るような設問をおくことはしなかったが、この間の影響は極めて大きく無視し得ないものとなっており、次年度以降の調査でどのように扱うかは検討の必要があるだろう。

4.4 今後の課題

調査の内容については、昨年度の記録と同様に、「青少年期の地域社会との関わり、地域観の変容などをみる先行研究を渉猟し、それらの比較分析・検討をふまえて、中長期的に意味のあるアンケート調査票を設計していくこと」は課題として残る。加えて、直接対面行動を制限されたこの間における地域社会との関わり方について、従来とは異なる関わり方をどのように測るかが、また新たな検討課題となるだろう。

そして調査の方法については、当初は今年度限りの問題で、次年度以降にはまた昨年度と同様に、紙の調査票を必修授業時間内に直接配

布・回収するという方法で実施していくものとして考えていた。しかし今後、追跡的に調査を実施することなども考えると、紙の調査票を直接配布・回収する方法こそが最善とはいえないところがあるのかもしれない。今回のオンライン調査の経験をふまえて適切な実施方法を検討していく必要があることも、認識している。

(伊藤真木子)

注

- 1 問2のCは、無効回答として、無回答(19年度3件、20年度3件)、「特になし」等(19年度2件、20年度1件)、「思いつかない」(20年度1件)の計5件をカウントした。無回答以外を無効回答とすべきかどうかは検討の余地があるだろう。なお、「平和」のみの回答(19年度)、「海外はすばらしい」(19年度)、日本が平和であることをあげた回答(20年度)は、判断に悩んだが有効回答としている。問5のBのeについては、無回答のみを無効回答とした。19年度9件、20年度12件である。
- 2 データファイルを「図書館」「博物館」「公園」で検索した場合のヒット数。「公園」については、城址やスポーツ施設についての記述を含めていない。

(文献)

西島央・大堀研・伊藤真木子 2020 「2019年度学生アンケート報告 ―1年生対象『コミュニティ人間科学部学生の地域体験と知識に関するアンケート』の分析結果―」『青山学院大学コミュニティ活動研究所報』創刊号 pp.43-59。

2020年10月

コミュニティ人間科学部学生の地域体験と知識に関するアンケート

コミュニティ人間科学部附置研究所

～アンケート協力のお願い～

このアンケートは、コミュニティ人間科学部所属学生のみなさんの、これまでの地域体験についてうかがうことで、これからの学習内容と指導方針の改善に活かすことを目的にしています。趣旨をご理解いただき、ご協力いただきますよう、よろしくお願いいたします。なお、パネル調査のため、学生番号・クラス番号を書いておりますが、テストではありませんので、なんらかの評価に影響することはありません。

<1>はじめに、あなた自身のことを答えてください。学生番号とクラス番号を、下線の上に記入してください。

- A. 学生番号 _____
 B. クラス番号 _____

<2>あなたが今まで住んできたところについてうかがいます。

A. あなたが、中学1年生の時に住んでいたところと、現在住んでいるところの住所（都道府県・市区町村まで、政令市は区まで）を記入してください。

時期	住所（都道府県・市区町村まで）		
①中学1年生	都・道・府・県	市・区・町・村	(区)
②現在	都・道・府・県	市・区・町・村	(区)

※横浜市、相模原市など政令市の場合は、区まで記入してください。

B. あなたは、いままでに何回引っ越しを経験しましたか。その回数を記入してください。引っ越しをしたことがない人は、「0」回と記入してください。

回

C. あなたが中学1年生の時に住んでいたところのお国自慢を、下の枠の中におさまるように、6行以内で自由に記入してください。

2020年10月

＜3＞あなたは、いままでに次のようなことをどのくらいしていましたか。A～Lのそれぞれについて、①小学校高学年、②中学生、③高校生、④現在の各時期ごとに、以下の1.～4.のあてはまる番号を記入してください。なお、学校でしたり行ったりしたことは含みません。

1. よくした 2. ときどきした 3. あまりしなかった 4. ほとんどしなかった

時期	A.地域のお祭や行事に参加すること	B.地域の子ども会活動に参加すること	C.教会やお寺等の宗教施設にお参りすること	D.山や海や川で遊ぶこと	E.公園で遊ぶこと	F.映画館に映画を見に行くこと
①小学校高学年						
②中学生						
③高校生						
④現在						

時期	G.公民館に行くこと	H.図書館に行くこと	I.博物館や美術館に行くこと	J.体育館や運動場に行くこと	K.スポーツ観戦に行くこと	L.コンサートや音楽フェスに行くこと
①小学校高学年						
②中学生						
③高校生						
④現在						

＜4＞あなたが中学生の頃のことについてうかがいます。

A. あなたは、中学校にどのようにして通学していましたか。

①主な通学手段は何でしたか。あてはまる番号の前の「○の記入欄」の箇所に○（←「まる」と入力して変換）を一つだけつけてください。

○の記入欄	
	1. 徒歩
	2. 自転車
	3. バス
	4. 鉄道
	5. 乗用車
	6. その他 (具体的に→)

2020年10月

②片道の通学時間はどのくらいでしたか。その時間を四角の中に記入してください。

	時間		分
--	----	--	---

B. あなたは、学校の行事や部活動のない週末に、出かけることができましたか。あれば、よく出かけたところについて、①誰と、②どこへ、③どんな移動手段で、④どのくらいの時間をかけて出かけて、⑤どんなことをよくしたか、この5項目が入るように、下の枠の中におさまるように、6行以内で自由に記入してください。もし複数箇所が思い当たったら、複数について記入していただいてもかまいません。

<5>あなたの旅行の経験についてうかがいます。

A. あなたは、家族での帰省や学校の修学旅行等とは別に、以下の宿泊を伴う旅行をしたことがありますか。①、②のそれぞれについて、あてはまる番号の前の「○の記入欄」の箇所に○をつけてください。

	○の記入欄	
①国内旅行		1. ある
		2. ない
②海外旅行		1. ある
		2. ない

※いずれかで「1. ある」を選んだ人はB. にも回答してください。

★両方とも「2. ない」を選んだ人は、これで終わりです。

B. 「A.」の①、②のいずれかで「1. ある」を選んだ人にうかがいます。

あなたのこれまでの旅行の中で、最も印象に残っている旅行についてうかがいます。

a. その旅行に行った時期はいつ頃ですか。あてはまる番号の前に○を一つだけつけてください。

○の記入欄	
	1. 小学校入学前
	2. 小学校低学年
	3. 小学校高学年
	4. 中学生
	5. 高校生
	6. 大学生

2020年10月

b. その旅行には誰と行きましたか。あてはまる番号の前に○を一つだけつけてください。

○の記入欄	
	1. 家族
	2. 友だち
	3. 1人
	4. その他 (具体的に→)

c. その旅行ではどこに行きましたか。具体的な行き先を四角の中に記入してください。

--

d. その旅行の主な移動方法は何でしたか。あてはまる番号の前に○を一つだけつけてください。

○の記入欄	
	1. 飛行機
	2. 船
	3. 鉄道
	4. バス
	5. 乗用車
	6. その他 (具体的に→)

e. その旅行で最も印象に残っていることを、下の枠の中におさまるように、6行以内で自由に記入してください。

これで終わります。ご協力ありがとうございました。